

**伝え方は変えられる  
それは青島の武器である**

7年——「踊る大捜査線 THE MOVIE 2 レインボーブリッジを封鎖せよ！」以来、7年ぶりに劇場版第3作がお目見えする。7年という月日を、織田裕二はどう感じているのだろうか。

「(スタートが決まったときは) あ、やっとできるんだな、って。『踊る』は5年ぐらいの周期というのが、僕ら(スタッフ・キャスト)には暗黙の了解としてあって、で、実際5年周期でやってきて(劇場版第1作は98年、第2作は03年公開)。でもその後和久さん(井川遥)や長介(及川光博)が亡くなられて、そこでぼっかり(穴)が開いてしまいました。(第3作を作ることは)考えられないですね、って。それはきつと、作り手みんなそうだったんだらうなと思います。

(和久平八郎というキャラクターは) あまりにも大きな存在だったんですよ。いま考えると、青島(後作)にとっては、甘えられる、存在だった。自然に何かを教えてくれる存在。青島は本当に甘えていたんだな……って。人って、(その対象が) なくなると初めて大切な存在だったと気づくじゃないですか。和久さんがいなくて、青島、どうしたらいいんだらう？ 精神的支柱は誰がやってくれ

るの？ どうもしっくりこなくて……。

これなら和久さんがいなくてもいい、観た人にも納得してもらえ、僕らも乗り越えられる、そう思えたのが、引越。という企画だった。引越。すれば、やっと乗り越えられる。ああ、そういうことなんだな、と思ったんです。というわけで7年かかってしまった。待っていてくれた人には、『ごめんね』と言いたいです。

13年——97年1月にTVシリーズ『踊る大捜査線』がスタートしてから13年が過ぎた。主人公、青島俊作の変わらない部分とは何だったのか。

「信念——自分がこれをやらなきゃいけない、とか、やりたいんだ、とか、やるべきことだ、とか。そういうこと自体は曲げない。それは僕もそうだし、青島もそうだし。でも、実は誰しもそうじゃないかな。みんなどこかで——『踊る』流にいうと、正しいこと、をやるうとして。とにかく、この方がいいんじゃないか、と思うことをやろうとしている。そこは変わってない。僕も常にそうありたいと思ってるんだけど、彼(青島)は、真正面からぶつかってダメだったら、じゃあ裏から、とか、じゃあ横から、とか、ちょっと角度を変えてみる。相手によって、シチュエーションによって変える。自分の伝えたいことは変わってない。でも、伝え方は変えられる。それが彼のすごい武器であり、魅力だと思つ。

シリーズを重ねていくと、青島の成長ということも必要になるとは思うけど、実際はすごく難しい。一体、どの辺が、どのくらい成長するかといえ、それは難しい。あんまり成長しすぎても気持ち悪いし、成長しなすぎてもそれは違うし。それは別に、今回の映画は、僕個人として、どこか、中間テスト、のような気もした。『君はいまままで、他の作品でどんな仕事をしてきたのかな？』って訊かれてるような。青島が常に成長過程にあって、出来上がっていない、から、そう感じたのかも。ない。

「ブレッシュャーはない  
青島と逢えたことが嬉しい」

40代——私たちは『踊る大捜査線 THE MOVIE 3 ヤツらを解放せよ！』で、40代を迎えた青島俊作に出逢う。織田が先に述べたように、青島には柔軟性がある。「3」では、改めてそのことに気づかされる。初めて登場する人物に対して、数年ぶりに再会するキャラクターに対しても。青島は、老若男女問わず、他者を否定せず、まず話を聴く。どんなに価値観や考えが違っていても、相手の存在を受け止めた上で、対峙

**PROFILE**

おだ・ゆうじ ● 67年、神奈川県生まれ。'87年『湘南爆走族』で俳優デビュー。'91年『東京ラブストーリー』のカンチ役で人気を不動のものにする。以降も'93年『振り返れば奴がいる』など、話題作に出演。そして'97年の『踊る大捜査線』では、女性だけでなく、男性層のファンも取り込み、トレンド路線とは一線を画した、俳優としての確固たる地位を築く。歌手としても活躍。  
公式サイト: <http://www.yuji-oda.com>

青島を演じているユ、何かパワーをもっている人間がある



SPECIAL INTERVIEW  
YUJI ODA  
X  
AOSHIMA